

曖昧反応の意味: 合成生物学とゲノム編集に関する日本の意識調査



ひびの あいこ
日比野 愛子

弘前大学人文社会科学部
准教授

研究の目的、背景

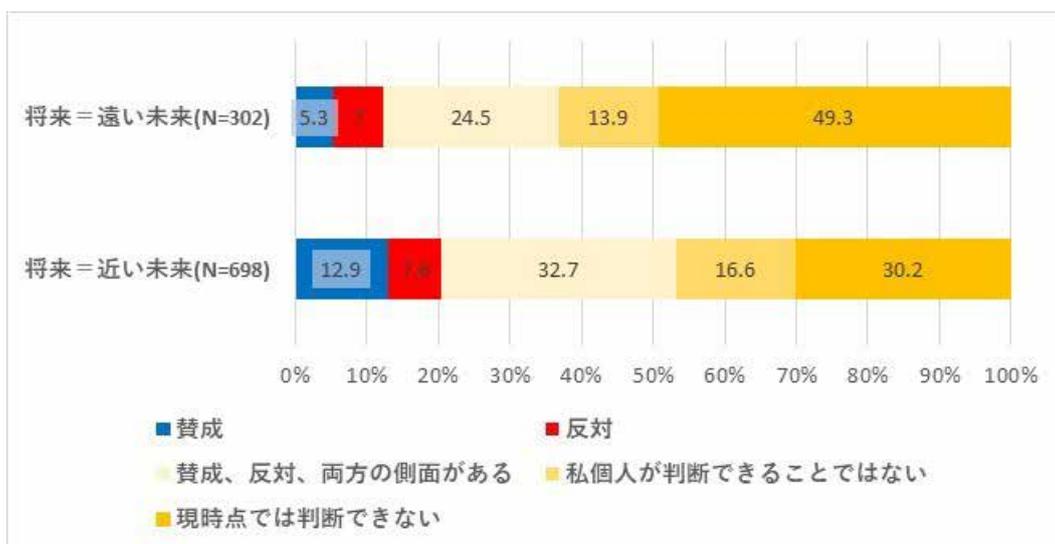
近年、ゲノム編集技術や合成生物学はめざましい進展をとげている。いずれの技術も社会制度に影響する可能性があり、人々の意見をまとめる活動が重要である。これまでの先行調査は、意見が「賛成」なのか、「反対」なのかのみに目を向けていた。しかし、萌芽的な技術は不確実性が大きく、技術への意見を賛成か反対で答えるのは容易ではない。「分からない」という反応(曖昧反応)が、むしろ素朴な答えだとも考えられる。そこで、人々の曖昧反応にはどのような意味が含まれているのか、また、曖昧反応はどのような世界観から生じているのかを明らかにすることを目的に本調査を実施した。

研究成果

ゲノム編集、合成生物学について、それぞれどのように考えるかを994名の回答者にたずねたところ、賛成・反対以外の曖昧な反応を示した回答者が約8割と多数であった。曖昧な反応の内訳は、(ゲノム編集に対して)「両方の側面がある」(30.2%)、「私個人は判断できない」(15.8%)、「現時点では判断できない」(36.1%)となっていた。合成生物学でもほぼ同様の割合であった。さらに、こうした曖昧反応がどのような要因に由来するかを解析した結果、その人がもつ固有の身体感覚や、将来を考えるときの時間感覚が関係していることが明らかとなった。たとえば、将来の範囲を狭くとる人、すなわち自分に近い数年下の世代が将来世代と考える人は、両側面を意識するが故の曖昧反応を見せていた(図)。

今後の展望

社会的な決定をしていく際には、賛成や反対の枠組みだけで議論するのではなく、問題の不確実性を共有することが重要である。その上で、いつどのように対応していくべきかを検討する必要があるだろう。本成果をもとに、テクノロジーの課題、また意思決定をわが事として把握できるような対話や制度設計を今後も検討していく。



将来の時間的展望によって異なるゲノム編集技術への意見の違い